

永久に連なる人々の営みと記憶

「カムイミンタラ」に寄せて~

高田 昌幸

ぬ書物が並んでいる。にちなんだ「郷土関係」の資料や図書のコーナーがあって、見慣れにちなんだ「郷土関係」の資料や図書のコーナーがあって、見慣れば図書館に行く。図書館の奥まった場所には、たいてい、その土地 多くの人がそうするように、見知らぬ土地に行くと、機会があれ

関係コーナーだった覚えがある。「カムイミンタラ」を最初に目にしたのは、そんな図書館の郷土

ろだから、1980年代の後半のことだ。れにしても、四国・高知生まれの私が初めて北海道へ移り住んだこは判然としない。いつのことだったか、それも明確ではない。いず、小樽市立図書館だったか、札幌市中央図書館だったか。その記憶

手先から生まれるわけがない。 浅はかなものである。人を引きつけて放さない、そんな文章が小取材だけでなく、文章のプロにもなる。そう意気込んでいた。

知る。 悲しむ。人を許すことを知り、地べたに這いつくばることの尊さを悲しむ。人を許すことを知り、地べたに這いつくばることの尊さをにあくびを幾度もかみ殺し、平凡な日々に飽き飽きし、再び笑い、起きて、食べて、働いて、眠る。何かに怒り、何かに喜び、退屈

いったい、どんな人が書いているのだろう。どんな人が、どんなな、文字通りの「珠玉の文章」が並んでいた。今から30年以上も前の北海道の、どこかの図書館で目にしたうから30年以上も前の北海道の、どこかの図書館で目にしたる、文字通りの「珠玉の文章が紡ぎ出すことなどできるはずもない。当たり前の話だが、そんな日常の、長い時間を費やしてこそ、人当たり前の話だが、そんな日常の、長い時間を費やしてこそ、人

人の話に耳を傾けているのだろう。いったい、どんな人が書いているのだろう。どんな人が、どんな

ことに、「カムイミンタラ」は目に付いた。毎号、欠かさずに手にしていたわけではない。しかし、不思議な

の奥深くに入り込む文章があり、私を誌面に引き込んだ。ると、そこには必ず、あの、流れるような、それでいて、自分の心が投げ出された職場のテーブル。何かの折にひょいと目に入る。す図書館や古い喫茶店、旅先のホテル、あるいは乱雑に新聞や資料

それはどんな文章だったか。

たとえば、1989年1月号に掲載された十勝の「児童詩」



おそらく、小樽で読んだはずである。「サイロ」を紹介するメーン記事。転勤族だった私は、この記事を

「サイロ」の文章はこう始まる。に降り積む雪に、ようやく慣れかけていた。を迎えていた。南国育ちの私も、静かに、ときには強い風音とともを迎えていた。南国育ちの私も、静かに、ときには強い風音ととも初めての北海道、初めての小樽。それも、このときは3度目の冬

そして親になり、また子へと受け継がれています。考え、表現することのよろこびを学んだ数多くの子どもたちを生み、の誌齢を刻んできました。その歴史は、詩をつくる心でものを見、たことを書きつづった児童詩誌『サイロ』はいま30年、346号思いがします。十勝のまちの子、平野の子が自然と生活の中で感じ思いがします。十勝のまちの子、平野の子が自然と生活の中で感じおとなの暮らしの中では影をひそめてしまった言葉がすなおなおして観になり、また子へと受け継がれています。

和碧の空、純白の雪景色につづく一本道をゆく

りたちました。 いまは廃線となった広尾線の豊似(とよに) 駅にひとりの紳士が降1959年(昭和34)の11月、帯広から約70キロ南へ下った、

なみです。ゆい眼をいやしてくれるのは、透き通るように美しい日高連峰の山ゆい眼をいやしてくれるのは、透き通るように美しい日高連峰の山冬とは思えないほどの上天気。一面の雪原から反射する光でまば

たりの丘のところを左に曲がって行くんだよ」さんのお宅はどこでしょうね」「この道を真っ直ぐ行って、突きあせと、一瞬、熊かと思うほどの黒い人影が現れました。「坂本直行たすら歩きつづけていると、道端の枯れかしわの林の中からガサガ道で人っこ1人通らない。 こんなに静かなところがあるのか ― ひ目的の家まで何キロあるのか、どこまでも真っ直ぐにつづく一本

時のことでした。

・いかえて、表紙を飾る絵の依頼にと十数キロの道程に足を運んだ製菓(株)の社長小田豊四郎さん(71)。『サイロ』の創刊を間近が一番」と、30年を経たいまも鮮明に語るのは帯広市・現六花亭勝地を見てきたが、ぼくの眼に焼き付くように残った景色は、これ勝地を見てきたが、ぼくの眼に焼き付くように残った景色は、これにひかえて、表紙を飾る絵の依頼にと十数キロの道程に足を運んだい。真っ直ぐ上っています。そのみごとさ。「その後も数多くの景勝のことでした。

でカンナをかけて敷いたかもしれない床板が、拭きに拭いてみごと開拓農家。初対面のあいさつもそこそこに部屋に通されると、自分を描きつづけている坂本さんは、当時、けっして豊かとはいえない日高山系のふもとで開拓生活を送りながら山岳や北海道の風物



<u>ڪ</u> に黒光りしています。「奥さんは、なんときれい好きな人なのだろ

事には、無償で参加させてもらいましょう」と坂本さん と、小田さんは懐かしそうに話しつづけます。「そういう美しい仕 色になって干してあり、それを小鳥がやって来てチュンチュンとつ いばんでいます。「なんと、のどかな光景だろうと思いましたね」 美濃半紙大のガラスのはいった窓の外には、トウモロコシが黄金

た。 うになって帰る、それが小田さんと画家の故坂本さんの出会いでし 予期以上の好意で願いは聞き届けられ、温かい昼ごはんをごちそ

の後にも文章は続く 記事にはここで、子どもたちの詩が2編、挿入される。そして詩

田勉三の率いる晩成杜によって開拓のくわが入れられ、多くの苦難 帯広市を中心に1市、16町、3村、36万人が暮らす十勝平野 明治中期に『開墾のはじめは豚とひとつ鍋』の句で知られる依

> 役割を担っています。 豆類、ビート、小麦、ジャガイモを収穫する一方、全道トップを誇 を経て、いまではわが国を代表する大規模畑作地帯になりました。 る生乳生産をはじめとした畜産など食糧供給基地としての重要な

野独特の風景をかもしだしています。 画するかしわや落葉樹や白樺の防風林と、点在するサイロが十勝平 広大な黒土に目の届くかぎりつづく作物のうね筋。その畑地を区

『青い窓』のなかの少女の詩に感動して

立てるのでは、という気がしました」 んだろう。十勝の子にもこんな道を開いてやれば、なにかのお役に れるようなショックを受けました。なんてすなおで、かわいい詩な ると、年が明けた2月号でひとりの少女の詩に脳天をたたきつけら えられ、盲目の詩人・佐藤浩さんの心が伝わってくるていねいな綽 な詩誌ですが、すなおな子どもの詩に画家橋本貢さんのカットが添 1958年(昭和33)こどもの日のことです。ガリ版刷りの素朴 む小田さんのもとに、福馬県郡山市の同業者である本名善兵衛さん 集でした。「柏屋さん、もの好きなことを始めたな程度に思ってい (現57)から児童詩誌『青い窓』の創刊号が送られてきました。 そんな十勝の歴史と風景を織り込みながら菓子づくりにいそし



かに具体化していったのです。 も古田足日(たるひ)、いぬいとみこらを中心に児童文学運動がたも古田足日(たるひ)、いぬいとみこらを中心に児童文学運動がたい頭し、一方では無着成恭の『山びこ学校』による生活つづり方運動が脚光を浴びはじめていました。そんななかで、十勝管内の若い動が脚光を浴びはじめていました。そんななかで、十勝管内の若いな話問に来ました。そこで『青い窓』の話をすると、「わたしも家庭訪問に来ました。そこで『青い窓』の話をすると、「わたしもなに具体化していったのです。

社会に役立ちたいという企業の文化活動に先べんを

長時代がスタートするのはその翌年からのことです。精いっぱいのころでした。池田内閣の所得倍増論による高度経済成の復興がようやく形をなし始めたばかりであり、経営の基盤固めが献を事業の一部として考えるようになってきましたが、当時は戦後現在でこそ "企業の文化化"がいわれ、多くの企業が社会への貢

う思いがその以前から培われていました。 しかし、小田さんには「なにか社会に役立つことをしたい」とい

1955年(昭和30)ころ、クリスチャンでもあり、全国を回

をしなければならない』と話していたといいます。

が持てたからできたのでしょうね」と、小田さんは語ります。の中心になる銘菓がそろっており、ほかの企業よりひと足先に余裕との出会いが重なったのです」「それも、すでに菓子店として経営があればやらなければならないな、と思っていたところへ『青い窓』だけれど、お菓子づくりから離れても、地域の人のお役に立つことだけれど、お菓子で作ってみなさんに喜んで食べていただくのもよろこび

無電灯地区にも文化の灯を送ろう

若い教師たちの意気込みのほどを語ります。 というのがわれわれの願いでした」と、野田さんは当時の けいれずにランプ生活をしている地区があり、そこにも文化の灯を けいれずにランプ生活をしている地区があり、そこにも文化の灯を があり、という思いをこめたもの。当時は、まだ電灯が いる地区があり、そこにも文化の灯を があり、という思いをこめたもの。当時は、まだ電灯が はにして十

の広場にしようというのが編集方針でした」と草野さん。「子どもたちの詩には手を加えず、できるだけたくさん載せる詩

その趣意文が管内約4百校の小中学校に送り届けられました。

よろこびとするような、少しでもみなさんのお役に立つような商売は儲けるためだけにするのではなく、お客さんのよろこびを自分のって経営指導をしていた新保民八氏がよく小田さんを訪ねて『商売



とうやって「サイロ」は始まった。教育委員会などを通じて掲載そうやって「サイロ」は始まった。1960年1月のことである。どもが生活のなかから発する言葉を大切にした詩が選ぶ基準になどもが生活のなかから発する言葉を大切にした詩が選ぶ基準にないがらの編を選んで創刊号はできた。1960年1月のことである。子詩の応募を呼び掛けたところ、最初から854編もの詩が届いた。

農作業、豊かな畑、十勝連峰、開拓の様子、薪ストーブ、電灯の本い家、動物とのふれ合い。春、夏、秋、冬。季節ごとに、子どもない家、動物とのふれ合い。春、夏、秋、冬。季節ごとに、子どもな、それでいて子どもにとっては重大な、学校での日常も綴られた。「カムイミンタラ」にこの様子が記された時点で、「サイロ」は29年もの年月を積み重ねている。その間に詩を寄せた子どもたちは、ざっと20万人。創刊当初に投稿した子どもは、小中学生の子は、ざっと20万人。創刊当初に投稿した子どもは、小中学生の子ともを持つ親になっていた。「カムイミンタラ」の1989年1月どもを持つ親になっていた。「カムイミンタラ」の1989年1月どもを持つ親になっていた。「カムイミンタラ」の1989年1月どもを持つ親になっていた。「カムイミンタラ」の1989年1月ともを持つ親になっている。彼女の詩が「サイロ」を飾ったの広市内の女性の話が載っている。彼女の詩が「サイロ」を飾ったのは、小学生のときだ。

う小さな詩でした。自然に出た気持ちをすなおに書いたら、とても「まだルンペンストーブをたいていた時代のことで、"火 " とい

ましたら、いまだにつづけているようです」3人の子どもたちに読ませてやり、作文や日記を書くことをすすめ褒めていただき『サイロ』にも載って、ほんとうにうれしかった。

に姿を現す。連ねるという、極めてシンプルな営みによって、それは私たちの前時間の重なり。そうした中にこそ、実は大事な何かがある。文字を一見、何の変哲もない、あるいは、退屈極まりないかのように映るそうやって物語は続いていく。

でいた。 「一気ない日常が紡ぎ出す、ほんとうの世界。「政府は」とか「米 をの彼は私に向かって、こんな話をしてくれた。 とかない、肉声の世界。言葉の主が子どもであれ、大人であれ、 あるいは言葉の形が詩であれ、インタビューであれ、ルポであれ、 あるいは言葉の形が詩であれ、インタビューであれ、ルポであれ、 がはそういった肉声の数々にこの全身が引き込まれることがある。 をの前は長距離トラックの運転席に座っていた。ハンドルこそがある。 人生であり、誇りもすべてそこにあった。 人生であり、誇りもすべてそこにあった。 その彼は私に向かって、こんな話をしてくれた。



だよ。あの時、対向車が来てたら、いまのおれはないもの。人生変をつねったりで。あああ、と気が付いたら、反対側車線走ってたこ本がら200時間。今と違って労働基準法とか関係ない世界さね。から200時間。今と違って労働基準法とか関係ない世界さね。から200時間。今と違って労働基準法とか関係ない世界さね。が、夜8時から芦別、帯広行きの運転席に座る。着くのは翌朝でしび、夜8時から芦別、帯広行きの運転席に座る。着くのは翌朝でしび、夜8時から芦別、帯広行きの運転席に座る。着くのは翌朝でしび、夜8時から芦別、帯広行きの運転席に座る。着くのは翌朝でしび、夜8時から芦別、帯広行きの運転席に座る。

二女が生まれた時もは、なんも大変だとか思わなかった。7歳でを辞める時も、嫌な思いをした。でもね、生きていけないよ。バスの時も。人間関係だ何だって、いろいろあるっしょ。バス会社辞めたくなったこと? あるあるある。何度も。トラックの時も

わってたよ。

く、めんこい子でね。周囲からは「大変でしょう、大変でしょう」わかんない、言葉も言えない。そういう子だったの。でも、とにか亡くなったけど、あの子は生まれつき脳に障害があって、親の顔も二女が生まれた時もね、なんも大変だとか思わなかった。7歳で

私らにしたら。もう、めんこくて、めんこくて。と言われたけど、何が大変なものか。普通の子供とおんなじですよ.

路線バス運転手の彼には夢があった。

樽市内の車庫で倒れてしまう。とアナウンスするのだ。しかし、定年の数日前、脳出血のため、小とアナウンスするのだ。しかし、定年の数日前、脳出血のため、小ょうで私のハンドル人生は終わります、ありがとうございました」定年の日は自分で回数券を買い込み、乗客に手渡しながら、「き定年の日は自分で回数券を買い込み、乗客に手渡しながら、「き

の前で本当に悔しそうに、そう繰り返した。本当に悔しそうだった。に乗ったトラックとバスのナンバーを全部そらんじていた彼は、私「くやーしくて、 悔しくて。 あの悔しさ、 一生忘れないよ」。 過去

-

替えた。は、その後、小冊子での発行を取りやめ、ウエブだけの発行に切りは、その後、小冊子での発行を取りやめ、ウエブだけの発行に切り、30年ほども前に、私が小樽で初めて手にした「カムイミンタラ」

中断や発行間隔の変更を経て、「ウエブマガジン」としての発行



齢はちょうど150号に達していた。もやめ、名実ともに終刊したのは、2010年11月号である。誌

制約もあったに違いない。発行元の「りんゆう観光」は民間企業でもあり、継続には種々の

と思ったものを褒めたかった」という。った。自分たちがふだん見過ごしているものに目を向け、褒めたいった。自分たちがふだん見過ごしているものに目を向け、褒めたいりんゆう観光社長の植田英隆さんは「北海道の足元を見詰めたか

さんは、こう言った。替わった。他界した人もいる。最後まで編集に携わった渡邊美千子帯かった。他界した人もいる。最後まで編集に携わった渡邊美千子「カムイミンタラ」は齢を重ねる中で、編集担当者が何人か入れ

いました」 人が生きていく、その姿勢をですね、伝えようと思います。人に焦点を当て、人を書く。それも業績とか、そういうを教わりました。そしてですね、取材の仕事は素人ですけれど、自を教わりました。そしてですね、取材の仕事は素人ですけれど、自を教わりました。そしてですね、取材の仕事は素人ですけれど、自めなりに一生懸命、相手の方のことを広く、広く、広く、伝えようと思います。人に焦点を当て、人を書く。それも業績とか、そういう思います。人が生きていく、その姿勢をですね、伝えようと思います。そこに大事なものがあるといました」

んはすでに他界している。女性アシスタントに1編ずつ朗読してもら50年の歳月を重ねた。「青い窓」を支えた全盲の詩人、佐藤さっかけとして生まれた「サイロ」。それぞれの冊子はすでに創刊か福島県郡山市で今も続く子ども詩集「青い窓」。それを一つのき

ける。
1原発事故の影響を受けながらも、子どもたちは今も詩の投稿を続しかし、「青い窓」は郡山に根を張った。 東日本大震災や福島第らい、 子どもたちの詩を選び続けた様は、 もうこの世にはない。

社会の記憶となり、根を張っていく。
書いて、書かれて。その流れの中で時代は連なり、人々の記憶は書いた人、書かれた人。そして、彼ら彼女らが年輪を重ねても、本イミンタラ」もインターネット空間に残っている。

(たかだ まさゆき・ジャーナリスト)